様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１８５１４

研究課題名（和文）和漢洋語彙ネットワークの形成と構造―言語問題に対応する新しい語彙論―

研究課題名（英文）Formation and structure of lexical network of native-Japanese words, Sino-Japanese words and foreign words: A new lexical theory for solving language problems

研究代表者
田中　牧郎（Tanaka, Makiro）

明治大学・国際日本学部・専任教授

研究者番号：９０２１７０７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：日本語の語彙を特徴付ける、和語・漢語・外来語からなる、語彙ネットワークの形成過程を明らかにする研究を行った。日本語歴史コーパスを用いて、平安末期と明治前期に焦点を当てた類義語群の分析を行い、古代から現代までの通時的な視点から量的・質的な分析を実施した。また、日本語の語彙の言語問題が生じる原因に、その語彙ネットワークの存在があることを指摘し、言語問題への対応に役立てるための語彙論の枠組みについて議論に着手した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語学の中に蓄積されてきた、語種論の知見と、語の意味・用法や語彙の体系の研究の知見を結びつけ、近年開発された歴史コーパスに基づくデータ分析を踏まえて、日本語の語彙の特質についていくつかの新見を提示できたところに学術的な意義がある。その語彙ネットワークの構造に起因する現代の語彙の言語問題のありようを整理し、その問題への対処法について議論を行ったところに社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：I have clarified the process of formation concerning the lexical network consisting of native Japanese words, Sino-Japanese words, and foreign words, which embody the distinctive characteristics of the Japanese vocabulary. I analyzed synonym groups in late Heian period and early Meiji period, and also conducted quantitative and qualitative studies from a diachronic perspective from ancient times to the present based on corpus of historical Japanese. Moreover, I have indicated the presence of the lexical network as the cause of the language problems in the realm of Japanese vocabulary and have embarked upon a discussion concerning the framework of lexical theory, aimed at facilitating the resolution of language problems.

研究分野：日本語学

キーワード：語種　和語　漢語　外来語　翻訳語　言語問題　語彙教育　語彙史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本語の語彙は、「ためし／事例／ケース」のような、ほぼ同義の三点セットに典型的に見られるように、和語／漢語／外来語の三層からなる和漢洋の語彙ネットワークを構成している。これは、歴史的な新古、使用文字の相違、語彙習得の順序などの特徴を示す点で、他の言語に類を見ない日本語の語彙の特質だと言えるが、その実相や本質は十分に明らかになっていない。一方、専門用語における難解な漢語、政治家やマスコミが使うわかりにくい外来語、年少者の読解力等の不足の背景にある合理的な語彙教育の欠如など、近年、語彙に関する言語問題が浮上することが多いが、こうした問題について日本語学が正面から議論できてこなかったのは、上記のような日本語ならではの語彙ネットワークの実相と本質が不明であったためではないだろうか。

また、近年の日本語研究の分野では、古代から近代までの日本語の変遷をとらえることのできるコーパスが整えられてきており、このコーパスを生かした新しい方法による歴史的研究の展開が期待されている。上に記した和漢洋語彙ネットワークの形成過程を解明するための新しい方法も、コーパスの活用を工夫することで開発することができるのではないだろうか。

２．研究の目的

日本語の語彙に特有の、和漢洋語彙ネットワークの形成過程と構造を明らかにし、語彙をめぐる言語問題への対処に資する、新しい語彙論の枠組を構築することを目指した研究を、近年整備されたコーパスを活用して行った。

３．研究の方法

和語・漢語・外来語が歴史的にどのように推移してきたかは、時代差・文体差などが把握できるように、『日本語歴史コーパス』所収の資料から調査対象を選定してデータを取得し、量的および質的の両側面から多角的に分析した。量的分析としては、延べ語数や異なり語数による語種構成比率を把握し、語彙頻度に基づく基本語の特定や、和漢それぞれの文体の特徴語の特定などを行った。また質的分析としては、和漢洋語彙ネットワークの本質をとらえることができる重要な時代（平安末期、明治前期）に重点を置き、いくつかの類義語グループを取り上げ、その意味・用法を詳細に分析し、語と語の相互関係が緊密になりネットワークが形成されていった過程を記述した。また、現代の言語問題の背景を解明するために、現代語のコーパスや、新聞記事データベースも活用した。近年指摘された言語問題のうち、医学用語「優性（dominant）」の意味の誤解を避けるために「顕性」に改められた問題や、初等中等教育における語彙指導の必要性の提唱を踏まえ、言語問題や言語教育に対して発言できる方向の研究例を示すことにも努めた。

４．研究成果

(1) 基層にある和語に漢語が本格的にかぶさっていくのは、和漢混淆文が確立する平安時代末期である。この時代を代表する資料である『今昔物語集』における和漢の語彙ネットワークの形成状況を考察した。まず、『日本語歴史コーパス』から『今昔物語集』の全名詞を検索し、『分類語彙表データベース』で「1.2 体の類：人間活動の主体」の意味分野に分類される語を抽出し、漢文脈の巻に偏在する語、和文脈の巻に偏在する語、文体に関わらずよく使われる語に分類することで、和漢の観点から見たときの語彙体系を把握した。その上で、相似た文脈で用いられるいくつかの類義語群を取り上げて意味・用法を詳細に分析すると、基本語（「人（ひと）」など）は意味用法が広く、和文特徴語（「人々」「者（もの）」「奴（やつ）」など）や漢文特徴語（「衆」など）は意味・用法に限定があることが明らかになった。そして、基本語には漢語が入り込んでいることがあり、漢文特徴語には和語も多いことが明らかになり、和漢の語彙ネットワークの構造は、語源としての語種だけからは説明できず、語が使用される中で独自の体系を構築してきたものであると考えられた（田中 2022a）。

(2) 西洋語の語彙が本格的に取り入れられるのは、明治前期からである。『日本語歴史コーパス』の明治前期の資料を対象に二つの調査研究を行った。まず、雑誌に用いられる外来語を網羅的に調査すると、重要な概念を表す語は、西洋語からの移入当初は音訳されるが（「liberty」など）、しばらくすると意訳語（「自由」など）が定着する傾向が顕著であることがわかった（田中 2019a）。そして、口語的な層に位置付く語（「開ける」など）と、文語的な層に位置付く語（「シビリゼーション」「文明」など）との間に、例えば具体的な事物について言うか抽象的な概念についていうかなど、意味的な対立関係が存在している傾向が強いことと、前者には旧来の和語・漢語が多く、後者には西洋語からの音訳語や意訳語が多いことが判明した（田中 2022ｂ）。また、平安末期の和漢の語彙ネットワークが時間をかけて形成されたものであったのに対して、明治前期の和漢洋の語彙ネットワークは短期間のうちに形成されたものと推測された。

(3) 基層は和語が中心で、基層から中層にかけて古くに借用された漢語が広がり、表層には近代以降に西洋語の訳語として作られた新しい漢語がかぶさり、現代には西洋語をそのまま音訳した外来語が重なっているという語彙ネットワークの形成過程を通時的にとらえるための調

査・研究を、量的な側面と質的な側面から行った。量的な側面からは、『日本語歴史コーパス』と『昭和・平成書き言葉コーパス』で語種構成比率を時系列で調べ、明治初期までの漢語の漸増、明治中期から昭和前期までの漢語の漸減、昭和期から平成期までの外来語の爆発的増加の実態を明らかにし、その変化の背景にある事情を考察した（2022 年 12 月に開催された日本歴史学会シンポジウムで発表。論文は投稿中）。質的な側面からは、例えば、古代に取り入れられた漢語「信」が、「信仰」「不信」「音信」などの漢語とともに次第に基層に組み込まれていく過程と、近代になって「信頼」「信用」「通信」などの多くの漢語が表層に流れ込み、基層にある語と緊密な関係を形成しながら語彙体系を新たなものに更新していく過程を記述した（田中 2019b）。

（4）医学用語 dominant の訳語「優性」が、優れた性質の意味に誤解されるとして、日本遺伝学会や日本学術会議が訳語を「顕性」に変えることを推奨し、中学校教科書の用語も変更されたという出来事を受けて、この訳語が誤解を招くに至った日本語史上の事情について考察したところ、次のことが判明した。古代に漢語「優」が借用されて以来、和語「まさる」と結びつき、「優」も「まさる」も他を圧する様子の意味で用いられてきて、近代に dominant を意訳する際にもこの意味の「優」を含む「優性」が選ばれた。ところが、近代には「優」に和語「すぐれる」も結び付くようになり、その「すぐれる」は、外に現れる様態やそれへの評価に焦点を当てる語であったところから、内に備わる性質に着眼するように意味が移行してきた（田中 2020）。こうして、和語・漢語の意味変化に西洋語由来の訳語が絡み合うことで、「優性」が「すぐれた性質」と解されるようになり問題化するに至った（田中 2019c）。

（5）初等中等教育における語彙教育で特に重要になるのが、思考や判断に関わることの多い抽象的な意味を持つ漢語の扱いであるが、従来は漢字指導として取り上げられに止まる傾向が強く、語彙指導のあり方への日本語学的な見地からの研究が求められていた。そこで、「基本」「基礎」「根本」「基盤」「根底」等の類義漢語を例に、辞書の記述に、現代語コーパスから得られるレジスター別頻度情報やコロケーション情報を組み合わせて、語彙指導に携わる教師や教材開発者が使いやすい形に語彙教育に資する情報を示す枠組みを提案した（田中 2019d）。

（6）上記の（1）～（3）は、語彙ネットワークの形成過程の研究、（4）～（5）は言語問題の背景の考察や言語教育への貢献のあり方を探る研究として行ったものである。(1)～(3)と（4）～（5）とを関連づけるような研究の必要性を認識し、断片的ではあるが、次のような研究に着手した。まず、語彙の言語問題への対応例として 20 年前に示された、国立国語研究所の「『外来語』言い換え提案」に取り上げられた外来語について、その後の 20 年間の新聞における使用実態を通時的に観察し、定着していない外来語を伝える工夫の類型化を試み、語彙ネットワークの形成過程の研究と、難解語への対応方法の研究の関連付けを試みた（田中 2022c）。次に、西洋語の訳語が学術語彙から初等教育の教育語彙に取り入れられていく過程を把握するために、明治初期の小学校理科教科書のコーパス構築に着手し、教育語彙を歴史的に研究する視点を提示するとともに、その研究環境の整備の必要性を提唱した（田中・髙橋 2023）

＜引用文献＞

田中牧郎（2019a）「明治前期の音訳外来語―『明六雑誌』『国民之友』の外来語調査―」（『国語語彙史の研究』38、pp. 379-398」
田中牧郎（2019b）「近代日本語における「信ずる」を中心とする語彙体系の変化」（『明治大学国際日本学研究』11-1、pp. 89-100）
田中牧郎（2019c）「「優性」「劣性」問題の日本語史的事情」（『遺伝子医学』9(4)pp. 38-44）
田中牧郎（2019d）「生きて働く知識・技能としての語彙―日本語学から提示できる語彙情報―」（『日本語学』38(1)、pp. 20-30）
田中牧郎（2020）「「すぐれる」「まさる」の意味変化―コーパスによる語史研究―」（『明治大学国際日本学研究』12(1), pp. 31-45）
田中牧郎（2022a）「『今昔物語集』における語彙の文体差―」（中部日本・日本語学研究会編『中部日本・日本語学研究論集』pp. 329-349）
田中牧郎（2022b）「明治初期語彙の文体差と意味的特徴―文化・歴史・風俗・禍福の語彙を例に―」（『近代語研究』23, pp. 63-83）
田中牧郎（2022c）「定着していない外来語への対応―「『外来語』言い換え提案」で取り上げられた語の新聞での使用実態の分析―」（庵功雄編『「日本人の日本語」を考える』pp. 151-165）
田中牧郎・髙橋雄太（2023）「明治初期理科教科書コーパスの構築と活用-『物理階梯』『小学化学書』『初学人身窮理』を対象として-」（『明治大学国際日本学研究』15(1), pp. 1-25）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 田中牧郎	４．巻 なし
２．論文標題 『今昔物語集』における語彙の文体差―人間・家族を表す名詞語彙を事例に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中部日本・日本語学研究論集	６．最初と最後の頁 329-349
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中牧郎	４．巻 39－2
２．論文標題 歴史コーパスによる語史研究	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語学	６．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中牧郎	４．巻 38-9
２．論文標題 生きて働く知識・技能としての語彙―日本語学から提示できる語彙情報―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語学	６．最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中牧郎	４．巻 9-4
２．論文標題 「優性・劣性」問題の日本語史的事情	５．発行年 2019年
３．雑誌名 遺伝子医学	６．最初と最後の頁 38-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中牧郎	4．巻 58
2．論文標題 『日本語歴史コーパス』による近代語彙の変化の研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Humanities Studies East and West	6．最初と最後の頁 115-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中牧郎	4．巻 12-1
2．論文標題 「すぐれる」「まさる」の意味変化―コーパスによる語史研究―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 明治大学国際日本学研究	6．最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中牧郎	4．巻 11-1
2．論文標題 近代日本語における「信ずる」を中心とする語彙体系の変化	5．発行年 2019年
3．雑誌名 明治大学国際日本学研究	6．最初と最後の頁 89-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中牧郎	4．巻 38
2．論文標題 明治前期の音訳外来語―『明六雑誌』『国民之友』の外来語調査―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国語語彙史の研究	6．最初と最後の頁 379-398
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中牧郎	4．巻 37-11
2．論文標題 日本語学は語彙教育にどう貢献できるか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 12-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中牧郎	4．巻 23
2．論文標題 明治初期語彙の文体差と意味的特徴―文化・歴史・風俗・禍福の語彙を例に―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 近代語研究	6．最初と最後の頁 63-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中牧郎	4．巻 なし
2．論文標題 定着していない外来語への対応―「『外来語』言い換え提案」で取り上げられた語の新聞での使用実態の分析―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 「日本人の日本語」を考える	6．最初と最後の頁 151-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中牧郎・高橋雄太	4．巻 15-1
2．論文標題 「明治初期理科教科書コーパスの構築と活用―『物理階梯』『小学化学書』『初学人身窮理』を対象として―」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 明治大学国際日本学研究	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 田中牧郎
2．発表標題 難解用語の言語問題に対応する言い換え提案の検証とその応用
3．学会等名 国立国語研究所共同利用セミナー
4．発表年 2021年

1．発表者名 田中牧郎
2．発表標題 明治知識人による語彙拡充の苦心
3．学会等名 2021年度ひと・ことばフォーラムオンライン研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 田中牧郎
2．発表標題 明治初期の口語語彙と文語語彙―『日本語歴史コーパス』の「明治初期口語資料」と『明六雑誌』の語彙比較―
3．学会等名 日本語学会2020年度秋季大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 田中牧郎
2．発表標題 語彙教育と日本語学
3．学会等名 第23回専門日本語教育学会 研究討論会　シンポジウム「語彙から広がる日本語教育」（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 田中牧郎
２．発表標題 『日本語歴史コーパス』でとらえる近代語彙
３．学会等名 啓明大学人文学研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中牧郎
２．発表標題 平安末期和漢混淆文における語彙の文体差 ―『今昔物語集』巻16を資料として―
３．学会等名 第80回 中部日本・日本語学研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中牧郎
２．発表標題 近代漢語の変容と辞書記述―「信」をめぐる語彙を例に―
３．学会等名 第54回 語彙・辞書研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中牧郎
２．発表標題 新漢語「協力」「協同」「共同」「共通」の基本語化
３．学会等名 漢字文化圏近代語研究会 2019 年度国際学術研究集会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中牧郎
２．発表標題 「優性」「劣性」はなぜ問題化したのか―日本語史的分析―
３．学会等名 日本医学会公開シンポジウム 適切な遺伝学用語のあり方
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中牧郎
２．発表標題 日本語史における和語
３．学会等名 語彙・辞書研究会第62回研究発表会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中牧郎
２．発表標題 日本語語彙の近代化における外来要素の受容と調整
３．学会等名 日本歴史言語学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中牧郎
２．発表標題 国語教育に語彙資源を役立てるには
３．学会等名 第17回NINJALフォーラム
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関